

山岸治男著『ひとの発達と地域生活慣行：循環・持続する発達環境を』

玉井, 康之
北海道教育大学

<https://doi.org/10.15017/1485120>

出版情報：生活体験学習研究. 14, pp.45-46, 2014-01-25. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

『ひとの発達と地域生活慣行』 — 循環・持続する発達環境を —

著者：山岸治男
発行所：近代文藝社



本書は、地域環境や生活環境が、子どもの社会的な発達環境として与える影響を、教育の視点・カウンセリングの視点・福祉の視点・家庭の視点・地域の視点などの多面的視点でとらえたものである。著者は、小学校現場での実践を出発点とし、教育学社会学・社会教育学・教育相談などを専門にし、さらに社会福祉士の資格も取得し、学校教育実践・地域教育実践・教育相談活動など、様々なキャリアを有している。これらの多様な経験が、多様な視点で、発達を捉えられる条件となっている。大きな章構成は、以下の通りである。

第Ⅰ部 親も教師も立ち往生する子育て

第Ⅱ部 子どもが変わった理由

第Ⅲ部 ヒト（生体）から人間（主体）への『旅』

第Ⅳ部 家族・地域社会で暮らす意味—対人関係と社会関係

第Ⅴ部 地域生活慣行の機能と意義—他者・社会集団・自己

第Ⅵ部 地域生活慣行の伝承と創造

第Ⅰ部「親も教師も立ち往生する子育て」では、

著者が実践的に行っている朝の交通指導や相談室・巡回相談で会う子どもたちの中に、交通違反・モラル違反をする子どもたちや、様々な特性を持つ子どもたちがいることをとらえている。これらの子どもの特徴の一つは、社会性が欠如し集団の中に入ることができないことである。そしてこの背景には、幼少期から人と交わることをせずに孤立した生活をしてきた日常生活の変化がある。著者は、これらの子どものカウンセリングなどを通じて、発達課題を持つ子どもたちが元気になっていく一つの要因として、グループや人と交わる転機が必要であるとしている。

第Ⅱ部「ヒト（生体）から人間（主体）への『旅』」では、世代間で生活感覚や対人関係が異なっていることを指摘している。しかも、若年になるほど、対人関係において挨拶や他者を尊重した行為が見られないということである。学生や大学教員にも、そのような傾向がみられるとしている。著者は、これらの行為を時には厳しく叱ったりしており、実践的にも第三者が注意することの重要性を指摘している。周りの大人からの指導や叱ることは、人との関わりであって、人間の発達には、特にこの関わりが重要であるとしている。逆に関わりを持たないで生活できる世代の中から「新人類」と呼ばれるような、希薄な人間関係を何とも感じない層が生まれている。

第Ⅲ部「ヒト（生体）から人間（主体）への『旅』」では、生き物としての人から、人間と人間の間の中で育つ人間を発達としてとらえることの重要性を指摘している。このことは、養育・保育・教育や生活などあらゆる場面で、生涯にわたって貫かれるものであることを指摘している。この発達の過程では、生活体験を通じて情動や感情などを育みながら、同時に役割と責任を高め、最終的には社会との関係の中で自己実現を図っていくことの重要性を指摘している。

第Ⅳ部「家族・地域社会で暮らす意味—対人関係と社会関係」では、子どもの頃に地域での遊び関係から、地域社会を身近にとらえ、集団と交わっていくことの重要性をとらえている。著者は、一方で集団性が形成されていかない背景には、新自由主義の中で、競争主義的な関係やバラバラな消費者としての利害関係があり、自分にとっての利益だけを追求

することよるとしている。これらの環境の中にあっても、一つ一つ他者に馴染むという経験の中で、徐々に籠もる関係から、社会的な関係に展開していくことの重要性を指摘している。経験の中でまた様々な学習をして、人間はそれを認識し、意思を持った主体となっていくことを指摘している。

このような人の発達にとって、著者は家族関係と地域社会が不可欠の要素であることを指摘している。ただ一方でそれらができない貧困・孤立・虐待の問題を抱えた家族が生まれていることも指摘している。これらの子どもたちは、キレやすくなったり引きこもりやすくなる傾向がある。これらの家族を共同体の中で少しずつ外に出していく取り組みの必要性も指摘している。

第V部「地域生活慣行の機能と意義—他者・社会集団・自己」では、伝統的な地域集団の拘束性はなくなり、集団の帰属意識がなくなる一方で、地域がどのような役割を果たしてきたかをとらえている。例えば、秋田県のなまはげ文化では、なまはげが地域の子どもたちを回って脅したりするが、なまはげは、鬼ではなく神の化身であると解釈されている。著者は、このなまはげの子どもへの教育的役割は、第一に、年長者を尊敬する念を持たせること、第二に、親の子どもへの愛情を自覚させること、第三に、年上の者も自己修養が必要であることを戒めること、第四に、弱者がいる家庭には配慮すること、などを潜在的に意識づける教育的役割があるとしている。

また地域行事は、地域を介した子どもどうしの人間関係を作る力、大人相互を結びつける力、地域に貢献する心を育成する力、働くことの重要性を認識

させる力などがあるとされている。著者は、この地域行事の衰退が、子どもにとって発達阻害となった大きな条件であるとしてとらえている。このようなかつての地域行事は、半強制的な参加であるが、地域行事に参加することは、社会との関係や人間関係を考えさせる重要な通過儀礼であったとしている。

第VI部「地域生活慣行の伝承と創造」では、地域生活慣行を阻害する要因とその克服の可能性をとらえている。著者は、元々地域社会は、異質な者を含めた協同性を持っていたが、現在は、携帯電話などに見られる個別ネットワークが形成されているとしている。この地域社会と離れた関係は、自然への畏敬の念や地域社会の生活常識を忘れさせてしまう条件となっている。

著者は、このような地域生活慣行を改めて重視するためには、これらを伝承するカリキュラムを再興する必要があるとしている。また地域全体で子どもたちの成長を喜ぶ視点を改めて啓発していくことが重要であるとしている。

このように子どもの発達環境として、地域の様々な無形の文化や地域生活慣行が、これまで子どもたちの健全な心や社会性を育てていた。それらの地域の社会的成長の条件がなくなった段階で、学校のみはその責任を問うても、本来の子どもたちの社会的発達は形成できないと言える。地域生活慣行の意義を改めて問題提起した本書は、現代の希薄な地域社会の教育的悪影響を問い直す上で、貴重な問いを我々に投げかけていると言える。

2012年刊

[近代文藝社、2012年、1,050円]

(北海道教育大学釧路校 玉井康之)